

ショートストーリー

「アーニャから お友達への 手紙」

ここでしか読めない書き下ろしショートストーリー。アーニャが故郷のお友だちに声のお便りを出していますが、その相手とは……？



「ああー、テスト、こちらアーニャです。どうですか？ ニ……あ、違った！ お、お友達。私の声、ちゃんと録音されてますか？ 今回はICレコーダーで、声の手紙に挑戦してみました。うう、こんな小さい機械でホントに入るか不安です」
あいかわらず聞かれては困るね。
封書から出てきたICレコーダーから流れた声は、私にいらつきを……どこか安らぐいらつきを感じさせた。
「仕事姿の写真も入れておきました。リオ先輩がデジカメで撮ってくれたんですよ」
同封された写真には、金髪碧眼の愛らしい少女ディーラーの姿が映っていた。髪を両サイドに振り分けたツインテールは、幼い頃に私の真似をして以来、ずっと変えずにきたものだ。
「えっと、ラスベガスはロシアより、かなり暖かいです。そのせいか、私のディーラー修行もかなり順調です。まだ、あまり物も壊してないんですよ！」
ふん、あいかわらず物を壊しているのね。あなたの先祖も、計算でドジを演出しているようで、

芯のところはしっかり真性のドジだったもの。これは遺伝ということかしら。
ボイスレターを送ってきたアーニャ・ヘルシングは、かつて私と行動をとともにした、あのメイドの子孫にあたる娘だ。当時、ヘルシング家の勇者が、姫君でなく彼女の方を選んだのには私も驚いたものだった。
アーニャは、いわゆる《抜けている》子なのだけれど、その《抜けっぷり》が尋常ではなくて、人を極度に油断させる不思議な力がある。気がつけば、私も不死の秘密と数百年前の冒険譚を明かしてしまっていた。そんな彼女がわざわざ「声の手紙」を送ってきてくれたことは正直嬉しい。
「で、ですね。ニー……じゃない。お友達！ 前も手紙に書きましたけど、リンダさんと二人で豪華客船カジノスパイラル号に招待されたって話です。お友達がすっごく反対してた件です……」
反対したのは、海の上ではヴァンパイアである私の力が極端に制限されてしまうからだ。ヘルシング家の最後の一人であるアーニャを狙う連中に、襲われれば苦戦は必至だ。

「あの……伝書コウモリさんが、すぐに返事を持ってきてくれたんで、お友達の心配は理解してるんですけど。それでも、私、やっぱりカジノ船に乗りたいと思うんです」
何ですって？ 思わず腰が浮いた。
「これはチャンスなんです。リオ先輩も姉妹船で活躍したんだし……。私たちが頑張らなきゃって、リンダさんと新米ディーラー同士、挑戦しようって決めたんです。」
私は親指の爪を噛んで《リンダ》のことを考える。最近、アーニャの手紙に頻繁に登場する《リンダ》はディーラーロボットだ。最初はどうせ、マネキンに毛が生えた程度のもんだろうと高をくくっていたが、届く手紙を読むにつれ、人間に近い高度な知能と自律性を持っているとわかって不安になった。
アーニャは最近、この《リンダ》と狎れ合いが過ぎる。
今回も「リンダさんも守ってくれるっていいですよ」なんて軽い手紙が届いたので、厳しく突き放した返事をしたのだ。
アーニャは何も分かってない。戦闘ロボットで

もないのに、鉄板を紙のように切り裂く狼男の爪に対抗できるって言うの？ せめて自分を守るように《二〇〇〇年式》を使いこなせるようになっておいて私が何度言っても聞かなくたって！
「あの、リンダさんに相談したら、お友達にはちゃんと説明した方がいいって言われて。声の手紙にした方が誤解がないんじゃないかってアドバイスもしてもらいました」
《リンダ》に相談してボイスレターにしたんですって？！ 名状しがたい感情に襲われた私に更に追い打ちがかった。
「えへへ、ICレコーダーも、実は一度リンダさんにプレゼントしたもんです。リンダさん、メモリ不足で、なんでも3分でパンパン忘れちゃうから。でも、この、レコーダーのメモリはリンダさんには使えないんですって。私って相変わらずドジですよ」
羞恥で、耳が熱くなるのを感じた。なんて屈辱。数百年の時をきたこの私が、ガラタロロボットが不要だと言ったICレコーダーを有り難がっていたなんて！ だから人間なんか気に許さなければならなかったのに！
思わずレコーダーを床に叩きつけようとした時に、その声は響いた。
「会いたいです」
……心がこもった声だった。
「だって、私が、ディーラーになる夢を叶えられたのは、お友達のおかげなんですから」
東欧からロシアに逃れてきたヘルシング家の末裔。勇者なんかじゃなくカジノディーラーになりたい、なんて夢をきいたのは、この子が私よりもずっと小さい時だった。
「会って……私の夢がかなった姿をみてもらいたいです。そして、私の仕事仲間や、リンダさんにも会ってほしいです」
まだ《リンダ》にこだわるかとカッとなった私は、信じられない言葉を聞いた。
「だって、リンダさんなら……ずっと長い時間が過ぎて、私が死んじゃっていても、お友達と一緒にいられるんですよ。リンダさんも「友達の友達だから」って一生懸命覚えてくれて、もうお友達の名前は3分たっても忘れないんですよ」



悠久の時を生きる少女——ニーナ

なんて思い……これだから人間を信じるのは……。
やめられないのだから。
アーニャが成長して連中にマークされはじめた今となっては、必要以上に距離をあけたり、私の名前を口に出すのを禁じたりするのはもう無意味だろう。
むしろ早く、王家の子孫とともにアーニャと合流した方がいいのかもしれない。
そう、決断と荷造りは早い方がいい。
私は、腰に手をあて、「会いたいです」を繰り返すICレコーダーに向かって宣言した。
「ふん、会えるわよ。ニーナ・ザ・ヴァンプがすぐに会いに行くわ！」

アーニャとニーナの関係とは……？

アーニャのお友達のニーナ。彼女は一体何者なのか？ 実は彼女は「十字架」シリーズの登場人物。かつて東欧のある城にいたドラキュラの娘なのだ。そしてアーニャは、ニーナに代わってドラキュラのコピー体を倒した聖騎士の末裔——ヘルシング家の血筋を引く者である。不死のニーナはこの一族をずっと見守ってきたというわけだ。なお、作中に出てくる《二〇〇〇年式》とは吸血鬼退治の鎧の最新バージョンと思われる。それにしてもアーニャが何者かに狙われているとか、ニーナがやってくるとか、その後が気になるストーリーなのだ。



ニーナ

ドラキュラの娘。各地で封印された父のコピー体を始末するのが使命だった。不老不死。性格は、数百年にも及ぶ筋金入りのツンデレ。



エミリ

敬愛するセーラのため、ニーナに託された鎧を着て吸血鬼と戦ったメイドさん。その後、聖騎士と結婚したらしい。



セーラ

お城で囚われていたお姫様。聖騎士（アーニャのご先祖）に助けられる。天然ボケだが吸血鬼を封印する力を持つ。

